

地 理 歴 史

1 全般的事項

問1 地理歴史科の目標及び内容と、中学校社会科の目標及び内容との関連はどのようになっているか。

中学校社会科の目標は「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質を養う。」となっており、現行学習指導要領の趣旨を継承しつつ、学習の過程で培われる能力や態度を重視する観点から、改善が行われた。

地理歴史科の目標は、生徒の発達段階や教科・科目の専門性、系統性を踏まえ、中学校社会科の目標を継承・発展させたものとして位置付けられる。また、中学校社会科の目標の改善を受けて、学び方を学ぶ学習や課題解決的な学習を一層充実して問題解決的な能力を育成する観点から、各科目の目標の改善が図られた。

中学校社会科の内容については、授業時数が、地理的分野と歴史的分野において、それぞれ現行の140単位時間から105単位時間に削減されたことから、知識の詰め込みに偏った学習にならないよう、各分野の特質に応じて次のように内容の厳選が図られた。

○ 地理的分野

日本や世界の地域構成の基本的な枠組みをとらえたり、広い視野から我が国の国土の特色を大観したりするなど、基礎的・基本的な内容に重点を置いて再構成された。

○ 歴史的分野

我が国の歴史の大きな流れをとらえさせるようにし、世界の歴史は、我が国の歴史と直接かかわる事柄を扱うにとどめることとされた。

また、各分野の特質を生かして国際化の進展等、社会の変化に対応する内容の刷新、更新が図られた。

さらに、公民的分野に、高度経済成長以降の世界と日本との結び付きや動向を通して現代日本の特色や人類の課題など、3分野を関連付けて扱う項目が設定され、広い視野から社会的事象を総合的にとらえる学習ができるようにされた。

地理歴史科における各科目の内容は、中学校社会科の内容の改善を受けて構成されていることから、地理歴史科の指導に当たっては、各科目の内容と中学校社会科の内容との関連に配慮して指導計画を作成し、中学校社会科の学習の成果の上に立って、高等学校生徒の発達段階や科目の専門性を考慮して学ばせることができるよう留意することが大切である。

2 世界史A、世界史B

問1 「世界史A」、「世界史B」における我が国の歴史や地理的条件との関連はどのようなものか。

我が国の歴史との関連については、「世界史A」、「世界史B」とも、「目標」に我が国の歴史と関連付けながら理解させるべきことが明示されている。また、「内容」では両科目とも日本人にとっての世界史という観点から各時代の世界の中に日本が明確に位置付けられており、東アジア世界の形成や東アジア海域を通じた文明交流の中で古代・中世の日本を、大航海時代から一体化に向かう世界の中で近世の日本を、19・20世紀の地球規模で一体化した世界の中で近現代の日本を、それぞれ扱うように構成されている。

地理的条件との関連については、世界史が地理歴史科の必修科目であることや歴史の理解における空間的要素の重要性を考慮して、世界史の学習全体を通じて重視されている。前近代史では、諸地域世界の風土や民族の扱いにおいて地理的条件を重視するとともに、諸地域世界を結ぶネットワークに着目するように構成されており、近現代史では、地域紛争や環境問題などの現代の課題の考察において、地理的条件に留意した構成となっている。

また、「世界史B」で新設された「(1)世界史への扉」の「ウ 世界史と日本史とのつながり」では、世界史の中で日本の歴史と関係が深い事柄に着目させ、相互の接触や交流を具体的に追究させることによって、日本列島の歴史が周辺の地域や世界と密接にかかわっていたことに気付かせ、「ア 世界史における時間と空間」の空間に関する内容では、身近なものや事柄の中から空間に関わる適切な事例を取り上げ、その起源や変遷などを追究させ、人々の空間意識の変容と多様性に気付かせるなど、我が国の歴史や地理的条件との関連が図られている。

問2 「世界史A」、「世界史B」の終結部における主題学習のねらいや取扱いはどのようなものか。

「世界史A」、「世界史B」の終結部における主題学習は、それまでに身に付けさせた知識や歴史の見方を踏まえ、現代世界で人類が直面している様々な課題を主体的に追究させて認識を深めさせることをねらいとしている。

「世界史A」の「(3)現代の世界と日本」の「オ 地域紛争と国際社会」「カ 科学技術と現代文明」は、先行するアからエの中項目において20世紀の歴史的特質と展開過程を学んだ上で、人類の当面する課題を生徒の主体的な追究を通して学ばせようとする項目であり、例示された課題などを参考に適切な主題を設定する必要がある。例えば「オ 地域紛争と国際社会」では、「国際社会の変化や国民国家の課題などについて考察させる」ことのできる主題を、「冷戦終結後の世界で起こった地域紛争」の中から選択し設定する。その際、生徒の主体的な追究を重視する観点から、各種の情報・資料の収集と活用、調

査・見学の実施、まとめ・報告・討論などの多様な学習活動を取り入れることが大切である。

「世界史B」の「(5)地球世界の形成」の「エ 国際対立と国際協調」「オ 科学技術の発達と現代文明」及び「カ これからの世界と日本」については、先行するアからウの中項目において20世紀の歴史的展開を把握させた上で、生徒の主体的な追究を通して現代世界の特質について考察させ未来を展望させるような主題を設定する必要がある。例えば「エ 国際対立と国際協調」では、「国際協調の意義と課題を考察させる」ことのできる主題を、「核兵器問題、人種・民族問題、第二次世界大戦後の主要な国際紛争など、現代の国際問題」の中から選択して設定する。実施に当たっては、生徒自身が現代の課題を主体的に追究し、考察することを促すため、作業的・体験的な学習を導入するなどの学習活動の工夫が求められる。

主題学習は、今回の改訂では「内容」に位置付けられたことから、年間指導計画に適切に位置付けて指導することが大切である。

問3 「世界史A」における前近代の取扱いの留意点は何か。

現行の内容の二つの大項目を統合して、「(1)諸地域世界と交流圏」が新たに設定されたが、この大項目は「世界史A」の中心である近現代史学習の前段として、導入的な位置付けとなっていることに留意する必要がある。

中項目のアからエでは、近現代史を学ぶために必要な諸地域世界の特質を構造的視野から把握することに重点が置かれており、個々の地域世界を通史的には扱わないとされていることに留意することが大切である。

また、「オ ユーラシアの交流圏」では、小項目として示された(ア)から(エ)の中から二つ程度を選択して、8世紀以降の諸地域世界の交流の深まりに触れ、ユーラシア規模の交流圏の成立とそれを支えた都市や港のネットワークを把握させるが、詳細な交流史として取り扱うのではなく、16世紀以降の世界の一体化のための諸条件がユーラシア交流圏の成熟を背景に整ったという視点から取り扱うようにする。

3 日本史A、日本史B

問1 「日本史A」、「日本史B」における世界の歴史や地理的条件との関連はどのようなものか。

世界の歴史との関連については、「日本史A」、「日本史B」とも「目標」において、世界史的な広い視野に立って、我が国を取り巻く国際環境などに関連付けて考察させるべきことが明示されている。「日本史B」についてみると、大項目の標題を「(2)原始・古代の社会・文化と東アジア」、「(3)中世の社会・文化と東アジア」、「(4)近世の社会・文化と国際関係」、「(5)近代日本の形成とアジア」、「(6)両世界大戦期の日本と世界」、「(7)第

二次世界大戦後の日本と世界」とし、それぞれの内容は「東アジア世界の動きとも関連付けて」、「東アジア世界の動向と関連付けて」、「国際関係の変化とその影響にも触れながら」、「アジアにおける国際環境と関連付けて」、「世界情勢と国内の動きを関連付けて」、「世界の動向と関連付けて」と示されており、各時代における我が国と諸外国との政治的、経済的、文化的な接触・交流が、我が国の歴史の展開にどのような作用を及ぼしたかを考察させるとともに、国際的な潮流の中に我が国を位置付け、世界の中の日本という視点で我が国の歴史の展開を考察させるように構成されている。

次に、地理的条件との関連については、「日本史A」、「日本史B」が地理歴史科に属する科目であり、地理学習との関連を図ることが必要であることから、日本史学習全体を通じて重視している。「日本史A」についてみると、「(1)歴史と生活」の「ア 衣食住の変化」では、身の回りの衣食住の変化に着目して主題を設定し、衣食住がどのように変化し受け継がれてきたかを、我が国の自然環境など地理的条件や、諸外国との交流など時代背景や地域社会とのかかわりなどとも関連させて、多面的・多角的に追究させるようにしている。

問2 「日本史A」、「日本史B」における大項目「第二次世界大戦後の日本と世界」の内容構成は、どのようなものか。

今回の改訂では、社会の変化に対応し、現代史を重視するとの立場から、大項目「第二次世界大戦後の日本と世界」の内容構成を次のように変更した。

「日本史A」、「日本史B」とともに、政治、外交、経済、文化を大きな流れの中で把握するというねらいから、「ア 戦後政治の動向と国際社会」では政治と外交を中心に、「イ 経済の発展と国民生活」では経済と文化を中心にして第二次世界大戦終結から1970年代までの時期を取り扱い、「ウ 現代の日本と世界」では1970年代以降の政治、外交、経済、文化を取り扱うこととした。

問3 「日本史A」における「(1)歴史と生活」のねらいや取扱いはどのようなものか。

この大項目では、日常的に接している生活文化や居住地或いは学校を中心とした身近な地域社会の変化にかかわる事象の中から、生徒の興味・関心や疑問・課題意識などに基づいて主題を設定し追究する学習を通して、歴史に対する関心を高めたり学習意欲を引き出したりするとともに、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることをねらいとしている。「ア 衣食住の変化」、「イ 交通・通信の変化」、「ウ 現代に残る風習と民間信仰」、「エ 産業技術の発達と生活」、「オ 地域社会の変化」の五つの項目の中から学校の環境や実態、生徒の興味・関心や疑問等に応じて、二つ又は三つの項目を選択した上で、各項目に沿ってさらに具体的な主題を設定し「追究する学習」を行うこととされている。

選択された二つ又は三つの項目のうちの一つは、この科目の導入として指導計画に位置付けて扱い、現在の政治、経済、文化をはじめ身の回りの様々な生活環境が歴史の産

物であることに気付かせるとともに、身の回りの事象について、「なぜこうなってきたのか」、「いつから始まったのか」、「どのように変化して現在に至っているのか」といった疑問や課題意識を持たせ、それを解決する学習を通して日本史学習に対する関心や意欲を高めさせるようにする。

選択した項目のうち導入として学習した以外の項目については、「内容」の(2)以下の学習と関連させながら、適切な主題を設定し、指導計画に位置付けて実施する。実施時期については、内容の(2)以下の学習を深めるようにしたり、学習のまとめとして実施するなど、ねらいや内容、方法に応じて、適切な時期に計画的に行う必要がある。

「歴史と生活」の学習対象は、「日本史A」の基本的性格から近現代とし、その追究のために近現代以前を取り扱うことが必要な場合は、最小限に扱い、主題を追究する学習が歴史における「部門史」の学習とならないよう留意するとともに、網羅的、羅列的な扱いにならないようにする必要がある。また、この学習を通して、生徒の歴史学習への意欲を高め、学習の動機付けが図られるように「作業的、体験的な学習を重視して実施」し、学習の過程において生徒が主体的に学習に取り組むよう指導するとともに、歴史資料の活用、情報通信ネットワークを利用した情報の収集・活用、博物館や資料館を利用した体験や実物に触れる学習、学校の周辺や地域での調査研究・見学等の実施、発表や討論、報告書のまとめ等の多様な学習形態を工夫することが必要である。

4 地理A、地理B

問1 地理的スキルを身に付けさせることが重視されているが、その内容はどのようなことか。

「地理A」、「地理B」の各項目や内容の取扱いにおいて身に付けさせることとなっている地理的スキルは、大きく「地理情報の活用に関するスキル」と「地図の活用に関するスキル」に分けてとらえることができ、それぞれ次のように要約することができる。

「地理情報の活用に関するスキル」

- ・ 地域に関する情報である地理情報にはどのようなものがあるか、諸情報の中から地理情報を選別し、また、地理情報の性格、種類などをとらえること。
- ・ そうした地理情報はどこで、どのようにすれば入手できるのか、地理情報の所在、収集に関する知識や方法を身に付けること。
- ・ テレビや新聞など、特に地理情報として提供されたものでない情報を、どのように加工、処理すれば活用が可能となるか、情報の地理情報化の視点や方法を身に付けること。
- ・ 地理情報を使って地域性をどう説明、紹介するか、地理情報の処理や表現に関するスキルを身に付けること。

「地図の活用に関するスキル」

- ・ 地形図や市街図、道路地図、案内書の地図などに慣れ親しみ、どこをどのよう

に行けばよいのか、見知らぬ地域を地図を頼りにして訪ね歩く技能を身に付けること。

- ・ 地図や地図帳に慣れ親しんで、この地名は日本のどこにあるのか、この人は世界のどの付近を訪ね歩いたのかなど、学習や日常生活の中で出てくる地名に関心を持ち、その位置を確かめるようになること。
- ・ ここにはどのような地理的事象がみられるのか、この地理的事象がなぜこの地域にみられるのか、既存の地図から地理的事象を読み取ったり、地理的事象を地図を通して追究しとらえたりする技能を身に付けること。
- ・ この調査結果やこの統計は地図に表すことが可能かどうか、地図に表すとすればどう工夫すればよいか、地域の諸事象や情報の地図化の適否を判断し、適切に地図化する技能を身に付けること。
- ・ 略地図を描く技能を身に付け、略地図で位置を示したり、略地図を使って日本や世界にみられる諸事象をとらえ、説明したりするようになること。

以上の地理的技能は、一度の学習や経験で身に付くというものではなく、それにかかわる学習を繰り返す中で次第に習熟を高めるように身に付けさせることが大切である。

問2 地理Bにおける系統地理的な考察方法、地誌的な考察方法とは、それぞれどのようなことか。

系統地理的な考察方法とは、現代世界の地理的事象を自然環境や産業、都市などの項目別に追究して各地の地域性を明らかにする考察方法である。系統地理的な考察方法を身に付けさせるためには、次のような段階を経た学習の構成、展開を工夫することが大切である。

- ① 取り上げる事象を決める段階
- ② 分布図、地域区分図などを読み取る段階
- ③ そうして読み取った分布の特色や規則性などを分析する段階
- ④ 取り上げた事象の特色が各地域内で他の事象とどのように関連し合って生み出されたのかについて考察する段階

地誌的な考察方法とは、日本、東アジア、アジアなど、大小様々な地域を規模に応じて多面的・多角的に追究して各地域の特色を明らかにする考察方法である。地誌的な考察方法を身に付けさせるためには、次のような視点や方法に留意して学習の構成、展開を工夫することが大切である。

視点…諸地域の特色は、地域の環境条件、他地域との結び付き、地域に生きる人々の営み及びそれらの相互関係を基本にして成り立っていること。

方法…直接経験地域の場合は、野外での観察や調査が中心となり、間接経験地域の場合は、地図や統計などの資料を基にした調査が中心となるなど、地域の規模に応じた調べ方や学び方。